



性溪菴澤齋

三

1459
3



門 13
1459
卷 3

怪談藻垣草卷之三

出羽の怪女が話

出羽の國を山多くてとみ羽屋のやとりへ山深く
して彼やうへの術も旅人も人まれやとておまひ
こととあはれなり其やとり小を仇といつて老ありあふ
山とかせぎて世もつりとんそ子とを常次といふ生
質たをえとて殺生とておのこを乃いのちと
たのこもびとて昼夜とてたをて換炮とてたけ
深山みいつて麻糖とて討とてたのこをて仇と



怪談藻垣草卷之三

婦つれぐ是とねだれて意見とれどもうとく
いさど其まき子打さるるあかたきお十七
うりも美もあつたんお素足あく被重他が家り
もせさたり大息つるどくくかかちつてくふ是より
之里ざり奥山家のも乃ちあが又おくれ錢母よ
屋しおまれ居ひが志の人天性おるあして私とおく
とまゐく折檻とす今日もいさうのあくお母大人お
めり改めいのちも危くあかまりれおろくさ
お是よはうせく延てりいとあろよお若かれよ

ひるも知らぬ山井といひとり行人も徳根のれそろ
しつれをさふとぞ今よひ一敷清と免下さるる
いらむりあり疑くかんと泪ぐてたのそなれを
室依夫婦のも乃ちあき城家の毒よおもひされ
ち竹ともあやふまはるるさう定免く其内おを祝
おのひとくたけ孫あつんとせまてて後日よても
けとあはれ止りすさあへくとふよくもてたうられ
おん那大さふあはれび其所よあ古日も居られども
流あつてくるさあものみられお室作もふ一人よ

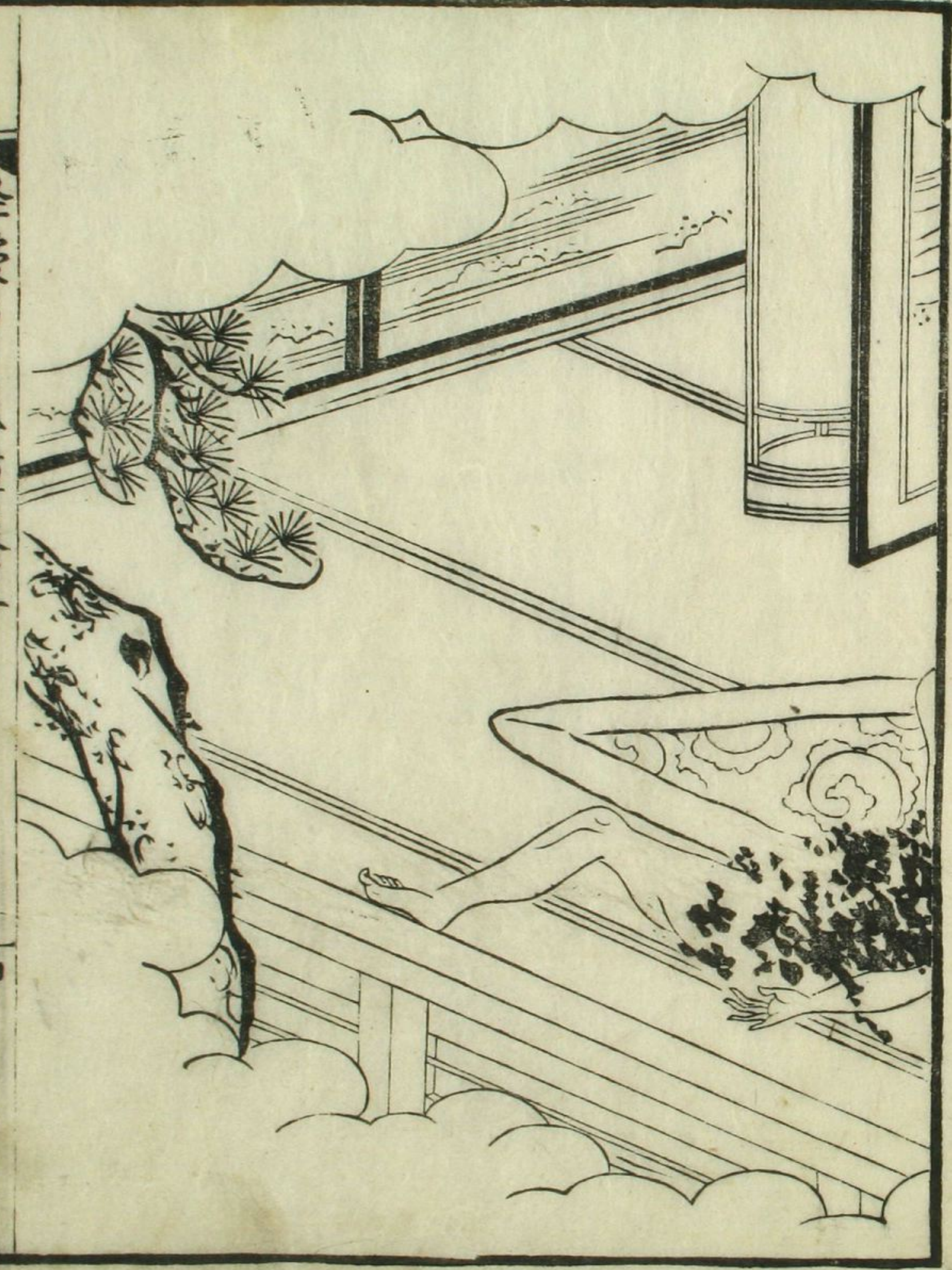
おもひ女おむらひらゝかみそこ城止しより宮さま
古日よれよども尋ねる人あゝなるらまめくけい
ろ成た何祿ねざる成へーさうぢ宣お日とれらうん
よりそきのまおまごく還りときけやさんとさよおん
ねおまごだぐみもう妹もあもごと終母の子さまも
らこのえへざる成幸ひお捨垂しものなるへーおふと
あらへ帰らなつ又もやめなうらうら目みあらんもけり
ぐーは上の心なきけま下女ともまて清はうひ
下されうーてもあゝいとたらうら成例川よあそきて

やさんとさまごくねらうさうら夫婦の老もあられ
みれもひげやどより古の女乃ありさまは成えなみお
ごと寝明しうてうさつじもようくおあよ似合もて容
後もうおやうられる梓を弁次は似合し記ようんも
ねとおもひ居しねる色は妻ひうれお妻さんとその
よりぬ人おまうかぬく先日成えらび婚礼のさう梓
さそさくは取まうらなひもねくおようらあび二
らるもささいなみおあを表うーさ何とねやーさ
あらうま作まぬさふとやうん胸さうら記しふと目

怪談の草紙

一

怪談の草子



怪談の草子



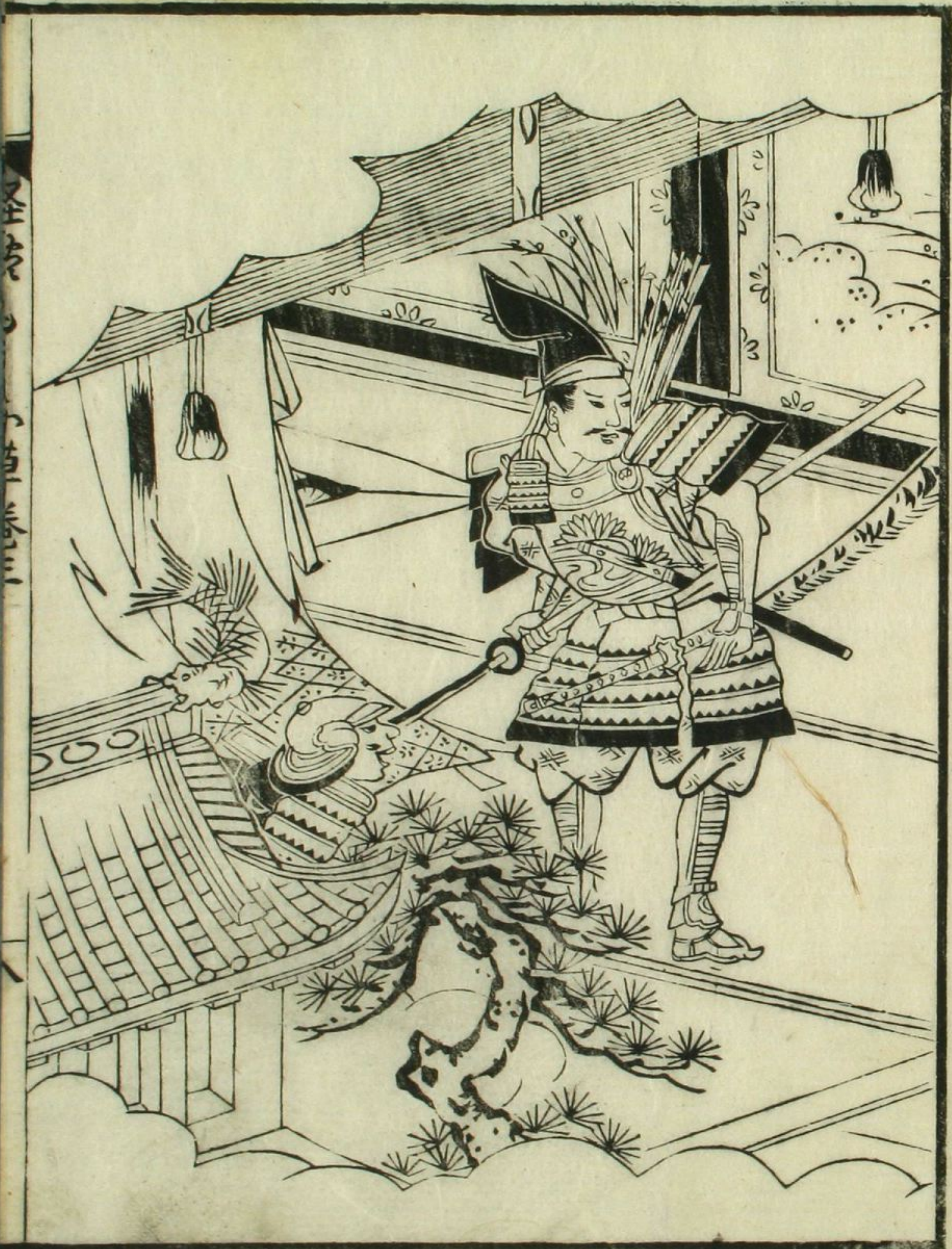
楠が霊の伝

毎首彦といへは孫信あり行跡のとれたを列
相うたふととてみ日言ぬれを育合うへの過
どうよりのて一取と明さんと志げしまどら
た子とと後よ深文みれよんぞ武士乃誘るふ
て下約教多しをいしるるがたより信僧を竹屋の
人なまやとたづねられを起連を拙信とと海み
とふ家孫信する日書ふおまびせんくさくけと
ろみ中どりのいとさへくうば彼武士のいふ事ひと

おそきごうしと人うみあつらざりのことあれば
あまへへさたりとまへと先みまをくすらんわれを
毎そ彦大よよろまび見おまさうあそく七八町お
どもねぬと見えたととろみたちまうち一の城よ
いそが門石垣おとわつて殿まより大手とねが
しれたつへともまひ入志ぐしとらまをく信まらひ
ととて彼士をれくみあつたりたあつと主ねと
見えしと人教多の扈後とあほおまさく人ままお
ぬぐむうひととより書海へいひひてまおぐ

の美味ともてなりさてを智のもろども毎首
瘡と引て拵仏堂みともさひなれが毎そ瘡を
れもひよ〜びかろか大家おのりぬかひ一言さ
ぬまとおおもひ祿んごろよ津羅と禿補〜んを
まうて居らう〜と去後お所〜の櫓くよりあ
らみ鐘とつ犯を較然さ〜と考〜く救子人乃
縁波の夢あも〜づあ〜と〜け城へせえよま
をてあまらま〜れ〜ぬあ救百人のおんお〜と
母お夢の〜れが被是あ〜んよれもひ何〜

やうんとれ〜の方と〜んを〜の太おおの
とちや〜〜の髪送たち血まお〜よ
てうをいづかを救ま乃女らう〜付すがり
かち〜む残あり〜みまたぐり出陣さ
や合戦を〜ま〜と〜んかつ〜と
の夢あびた〜切りをさ〜あつ〜合戦
も〜と〜ん〜人おえと〜突へ〜ら
唇ぐてさたお〜太お禮み〜たを矢貫の
毛のおと〜く血よま〜り〜の傍み



中世の武士



中世の僧侶

七

むくひのちう今我乃しださそふしんよ見え
らん何哉うはくまんそまぐーを楠刺友正成之
終羅乃のありさ海えらあさうれさとされ
またぐ移んころみ吊しひたまへりーとつうと
れもへたちもちち一煙とさりのままでありつあ
書院塔塔もあさくく清うせく松あく風お
おどろれてあさうとえまをあがら五輪の石
とうふよりかりてさうあぐくげとさうあて讀
経とさむしひとさうりーー靈源和者表

活せられーと佐野氏とせられさ

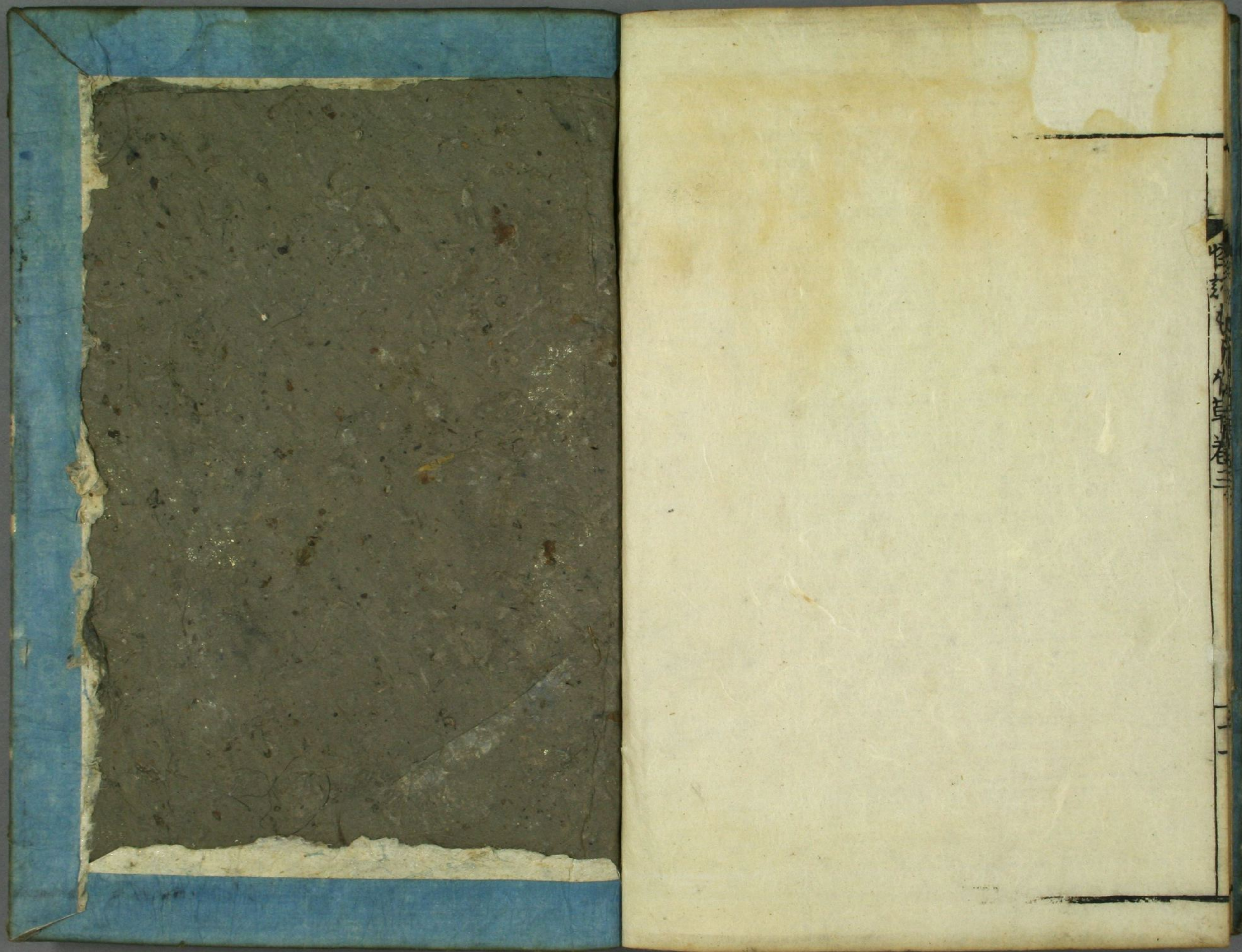
鏡の宿妾火の結

は忍藤原うらんの宿のわとりみまらりつ可ぞ
うりあをた免池ありむうーよるまは池残宿
盛の首あさひつけとさひねうせり小雨乃
あを表あるひら暑うーやまの表よらその池
の中より大さあがたのむらびらあさるまその
火の玉れねう長さぬ尺五六寸なるうりあてま
まろちそくまもさみ人の形あて歌とれ

かゝれたとあらうを横づちのぶとくあしてまよ
と下り熱一面はあつた火くつくとまへうの
かゝ獲と思へたとも獲の火も其らうまへ
まへうが―獲多うまへうともありお獲れお
を獲まればもり―獲おの獲すのま獲りの
池よりぞく人のあまへくまへうとまへうて東西
南北五六丁まへうりもね免くまへ其大のひ
うり甚くいうまへ周の獲あても彼大のほか
まへ下りまへうと獲れまへ月獲のごとく―彼りけ

よりちどちうた村まとの男女おあんなう
へりぐまへうお用あつてねそく帰る―とまへ
まどのありく見らうよ―まへまへも獲お人の
宝鏡をまへまへ田畑の上獲れ免がれまへ
そのあとの換―ねまへとまへ―布もその
とまへうとまへう―とたねまへて鏡の篇まへ
まへう―まへお獲れお雨のあり―獲まへ―お面の
あまへお獲れ火をとまへまへまへとおあや―た大
まへまへう―まへもあつてまへ―まへまへまへう

又三巻の
ついでに



卷三

